

三十四五年頃の東京能樂界

三十四五年頃の東京能樂界を一瞥してみると、觀世宗家は牛込新小川町の舞臺にたてこもつて他の催うしへは出演しない。觀世清之、木下敬賢、山階徳次郎、觀世元規らが宗家をたすけて新小川町（大曲）の舞臺を賑はしてゐた。別に山階徳次郎は濱町に舞臺をもつてゐた。梅若實の淺草藏前の舞臺は、旭日昇天の勢いで榮えつゝあつた。寶生九郎は松本金太郎と共に猿樂町の舞臺へ出演して、後進の養成に全力をつくしてゐた。金春八郎は櫻間伴馬後見のもとに藝道をみがいてゐたが、舞臺をつくりうる程流勢は盛んでなかつた。金剛流のみは宗家鈴之助（後の右京）關西に流浪し僅かに寺田左門治が東都に於いて孤城を守るのみであつた。

第三章 隆盛時代の能樂

第一節 日露戦争前

池内信嘉と能樂館

明治三十五年は、能樂史上特筆すべき年である。この年五月二十五日伊豫松山の人池内信嘉上京し、能樂館を設立し、其内に能樂俱樂部を設け、樂師養成を計ると共に、一方雑誌能樂を發行

囃子方養成事業

して斯界に一大刺戟を與へるに至つた。（これ以前明治二十五年に東京能樂新報と云ふものが發行され、たことがあるが、永續はしなかつた。）池内信嘉の能樂館の事業中特に記憶すべきは、囃子方養成の事業であつた。當時東京の囃子方の状況を見るに、

三須錦吾（小）七十一歳	森田初太郎（笛）七十歳	山下貞胤（太）七十歳
幸義太郎（小）五十八歳	觀世元規（大）五十八歳	高安龜叟（大）五十八歳
植田源藏（太）五十八歳	大倉六藏（小）五十三歳	増見仙太郎（太）五十三歳
一噌要三郎（笛）五十一歳	三須平司（小）五十一歳	藤田多賀藏（笛）四十九歳
大倉繁次郎（太）四十八歳	寺井三四郎（笛）四十一歳	

と云ふありさまで、何れも後繼者なく心細き状態であつた。東京既にかくの如き状況であり地方に至つては、一層悲惨をきはめた。この悲觀すべき状況から囃子方を救つたのは、能樂館の囃子方養成の事業であつた。

能樂俱樂部の發會式

能樂俱樂部は明治三十五年の九月七日に日比谷大神宮奉齋會内で意義ある發會式をあげた。當日の番組は、

第四編 維新後の能樂

舞 囃子

高 砂 野口政吉

高 須安平三

杉 觀世元規

獨 吟

攝待語り 寶生金五郎

番 囃子

砧 松本九郎長

寶 生 新

幸 高安龜叟 觀世元規 森田初太郎

狂 言

栗 饒山本東

素 謡(素人)

小 督 竹山静子

富 田 琴子

一 調

鳥 追舟 松本長

三 須 錦吾

女 郎 花野口政吉

川 崎 利吉

舞 囃子

忠 度 金子龜五郎

古 古川直浩子

一 噌 米次郎

狂 言

茫々頭 山本東次郎

舞 囃子

富 士 太鼓 松本長

大 倉 繁次郎

森 田 初太郎

春 日 龍神 喜多六平太

高 大 倉 六藏

一 噌 見仙太郎

囃子方勤料
値上問題

この後、俱樂部では、三十九年三月から夜能を催うすこととなり、約五年間繼續された。三十五年の九月に至り、囃子方より勤め料値上げの議を提出し紛議をかました。當時は囃子方に入なき時代とて能の催うしがち合ふと一ヶ所を一人でうけもたねばならないと云ふありさまであつた。しかも勤料はやすく、川崎利吉の如き梅若で六番を打通しても其報酬は僅かに五圓と云ふやうなあはれな状態であつたので、値上げ問題の起つたのは當然であつた。この問題の解決には約二年の月日を要した。

本間廣清と
寶生俱樂部

池内信嘉の能樂俱樂部が華々しく發會式をあげるとまもなく、寶生流に寶生俱樂部と云ふ團體が組織され、本間廣清其主事として萬事をきりもりをした。この後俱樂部は寶生會の別働隊となつて流勢擴張に努力した。三十六年一月三十日以來毎月一回素謡囃子會を催うした。素謡二番と三番の囃子を見せたのである。(寶生會に合併)

金剛宗家の
東上

明治三十六年に至り、久しく關西を流浪してゐた金剛宗家鈴之助(右京)が觀世宗家の盡力に依つて歸京しこゝに東都に五流の宗家が揃ふこととなつた。四月二十六日に觀世宗家舞臺で、披露能が催うされた。

郡 耶	寺田左門治	鏑木祚胤
杜 若	觀世清廉	大支信安
戀 重 荷	觀世清之	鏑木祚胤
道 成 寺	金剛鈴之助	寶生 新
糺	木下敬賢	亂生金五郎

この年八月八日觀世清廉は、一門を卒ゐて、北海道へわたり各地で能興行をした、これが動機

梅若問題

となつて北海道の能樂は勃興するのである。
この頃梅若家對一般能界との間に二つの紛擾を生じた。一は大鼓方石田清吉の梅若舞臺出勤、一はワキ野島吉五郎(今の信)登庸に關してであつた。けれどこれも其後解決した。

第二節 日露戦役と能樂

日露戦役と
軍資金募集
能

明治三十七年日露戦役開始せらるゝやいちはやく二月十三日に飯田町喜多舞臺で軍資金募集能が催うされた。時宜にかなふた催うしであつた。

三 輪 紀 喜 眞 高 濱 清	大倉繁次郎	觀世元規
田 村 金 春 八 郎 安 藤 省 吾	川須利平司	森田初太郎
白 式		一噌米次郎
郡 耶 櫻 間 伴 馬 鏑 木 祚 胤	加藏八百作	山下貞胤
望 月 喜 多 六 平 太 寶 生 金 五 郎	高安清次郎	寺井三四郎
	幸高安清次郎	藤田多賀藏

第六編 維新後の能樂

一八八

羅生門	金子亀五郎	寶生	新	高安	鬼三	山下	貞胤
二人袴	山脇元清			須	錦	樹	如月
吃り	山本東次郎			三	香		
大般若	野村萬造						

これに刺戟されて、三月十三日に寶生流、三月二十、二十一兩日に觀世流、二十七日に梅若家で軍資義捐能が行はれた。この時觀世清廉は大和田建樹作の新作能鷲を演じた。この年十一月廿三日に牛込婦人會主催となつて五流聯合の能を靖國神社舞臺で催うし、収益の全部を出征軍人の家族授産會に寄附した。

觀梅兩家の和解

戰爭の開始と共に、世間を憚り能の催も休止の姿となり、能役者一同大いに困窮したが、追々捷報の傳はるにつれて、常態に復した。

三十七年の末に至り、觀世宗家と梅若との葛藤漸くとけ、兩家和解の紀念能が、十月二十二、二十三の兩日觀世宗家舞臺で行はれた。清廉は三輪と安達ヶ原を、實は俊寛を萬三郎は安宅勸進帳瀧流しを、六郎は鉢ノ木を演じた。

海外に於ける演能の始め

こえて明治三十八年四月に至り、兵庫縣和田神社舞臺(四月十日)大阪博物場(四月十五日)東京觀世舞臺(五月七日)で、觀阿彌五百年祭能が盛大に行はれた。

三十八年五月に、觀世清廉は、京釜鐵道開通式祝としての京城南大門前での祝賀能に出演した。これ海外演能の嚆矢で、朝鮮に能樂をうるゑつけた功は大であつた。當時京釜鐵道の社長は古市公威であつた。一行中のシテ方は

觀世清廉、片山九郎三郎、大江又三郎、大西亮太郎

であつた。

一行が、歸途馬關に上陸した時、日本海々戰の捷報に接したと云ふことである。つゞいて十月喜多六平太は一門を卒めて渡臺し、各地に於いて能を演じた。これ新領土に於ける初めの演能であつた。

第三節 日露戰後の能樂

日露戰役大捷の結果、我が帝國は一躍世界の一等國に列するに至つた。國運の發展と共に能樂

日露戰役後
能界は面目一新

能樂全史

一八九

も一大勃興をなし、面目を一新するに至つたのである。

明治三十九年に入るや、能樂俱樂部は、夜能を催うすこととなつた。この新事業は舞臺をもつて流儀は別として舞臺なき下がりの金剛金春にとつては演技の機會を多からしめた。

和泉流宗家
對白水會問
題

狂言和泉流は宗家元清モトキヨに一流統一の實力なく、流儀内に紛争たえなかつた。高島彌五郎タカシマヤヅロが横濱茂木邸モギキテにて金岡カナガハを演じたので、元清は「家元よりのゆるしなきに大曲を演んずるは不都合なり」として高島を破門し、尙ほ其時相手をした小早川野間の兩人に藝事さしとめを命じた。この處置は家元として至當であつたが、時勢の然らしむる所か、家元の威力は及ばずして、高島小早川野間の一派は白水會ハクスイカイを組織して、宗家に對抗するに至つた。しかも世間の同情は、この白水會に集つた。(後に兩派は) (和解した。) この年四月には

寶生九郎一
世一代の能

(イ) 寶生宗家古稀祝能

(ロ) 寺田左門治還曆能

(ハ) 梅若快氣能

の三大祝能が行はれた。寶生宗家九郎ホシシヨウシクケクは當年六十九歳、後進養成に専心せんがため一世一代の舞

納めを四月十五日靖國神社舞臺に於いて催うした。この日九郎は安宅延年アサキニシノメイ舞を演じた。ワキは東條照映トウジョウシヨウエイ、大は川崎利吉カワサキリキチ、小は幸清次郎コセイジロ、笛は藤田多賀藏フジタタガザウであつた。これ以後九郎は歿する迄後進の養成に努力して自ら舞臺にたゝなかつた。寺田左門治テラダサモンジは尾州藩の御抱え役者で明治十九年東上以來、家元の留守をあづかつて金剛流のために孤軍奮闘した。この人の還曆祝能は觀世舞臺で行はれたが同情集り頗る盛況であつた。この日左門治は道成寺古式を演じた。ワキは寶生新ホシシヨウシン氏であつた。

金春八郎の
死と家元問
題

四月四日、金春宗家八郎は牛込の邸で歿した。この結果奈良住の金春廣運コンバムコウウン(先々代の實子)が家元となり名をば七郎と改めた。けれ共、七郎は奈良に住して東上せず、隨つて東都に於ける金春流は、櫻間伴馬サクラマバンマ一門の一人舞臺であつた。七郎は後年病歿し、現家元光太郎コウタロウが家藝をついだのである。

金剛家祖先
五百年祭

金剛宗家右京と京都の金剛謹之助とは永く不和であつたが、時來つて兩者和解し、九月三十日の金剛家祖先五百年祭には、遙々京都から謹之助も出演した。

鶉 飼 櫻間伴馬 鎗木祚胤

能樂全史

第六編 維新後の能樂

巴 喜多六平太 大友信安

素謠松風 寶生九郎 松本金太郎

仕 舞 二人靜 梅若萬三郎 鳥追 舟 觀世鐵之丞

松 虫 松本長天 鼓 觀世清之

融 寺田左門治

放下僧 觀世清廉 寶生新

葵ノ上 金剛謹之助 野口貴五郎

石橋 金剛 巖 寶生新

連獅子 金剛鈴之助 寶生新

狂言

箴 屑 野間善左衛門

伊文字 山本東次郎

佛 師 高鳥彌五郎

ついでに京都に於いても金剛祖先慈覺五百年祭の能樂を行つた。

寶生九郎の義俠

寶生九郎は、義俠心の強い人であつた。金春の櫻間伴馬は深川に寶生九郎を訪ひ、「一子金太郎について後援」を依頼した。九郎は直ちに快諾し、この年十二月より、寶生會月並能の際金太郎に一番づゝ能を演んじさせることゝなつた。金春流は、寶生翁からうけた恩義を忘れてはならぬ。

東京博覽會の餘興能

明治四十年に至り、東京府の博覽會が上野公園で開催された時、演藝館で博覽會協賛能を行つた。これは齋藤孝治氏から交渉があり觀世清廉が萬事幹旋の勞をとつたのであつた。池内信嘉が努力してきづき上げた能樂館は、能樂會に合併せられたので、能樂俱樂部の事業も能樂會に引づくことゝなり、池内信嘉は能樂會の事務にたずさはることゝなつた。これ明治四十年末のことであつた。これ以後能樂會は積極的に擴張事業を行ふに至つた。

片山清久觀世家の養子となる

四十一年一月二十七日、片山九郎三郎の長子清久(今の左近)は宗家清廉の相續人と決し其披露の宴が催うされた。この頃清廉は病氣のため出演することが出来ない状態にあつた。この年に至り、能樂新報、能樂畫報等能樂雜誌が發行せられるに至つた。能樂の雜誌としては池内信嘉の能樂が古いのであるが、イマ發行年代に誌名をしるしておく。

能樂雜誌續々刊行

能樂 (明治三十五年、發行者池内信嘉)
國 諷 (明治三十九年、泉泰知)

風々之友 (明治四十年)

能樂新報 (明治四十一年、勝野嘉一郎後横井春野にうつる)

能樂畫報 (明治四十二年、齋藤香村)

謡曲新報 (明治四十三年、澤藤紫川)

この他の雜誌は皆大正時代に至つてから刊行されたものである。

世阿彌十六部集の刊行
明治四十二年に觀世世阿彌の遺著「十六部集」が吉田博士の校註で能樂會から發行された。この古典をえて、能樂史の研究は一生面を拓くに至つた。

梅若實病歿

四十二年一月十九日に、梅若實は八十二歳で歿した。能樂會々頭蜂須賀侯の弔詞に

「嗚呼能樂界の泰斗梅若實翁は逝く矣、斯道の爲寔に深悼痛惜すべきなり。翁や幕末の擾亂に際し貧困艱苦嘗て其志を變ぜざりしは、猶ほ雪中の松寒を冒して獨り其操を守るが如く、維新の隆昌に乗じて奮勵振作つひに其業を盛んにせしは、猶霜後の梅春に遇うて能く其香を

吐くが如し。云々」

と。

金春流謡曲本の完成したのも、三須五郎が、幸五郎次郎の家を再興したのも、皆この年の出来ごとであつた。

當時の素人能の大家

この頃から、素人能が漸く勃興し始めた。當時活躍した紳士能樂家は、觀世流で三井溪泉、和泉應三(三井徳右衛門)、井伊直忠、最賀亮輔、古市公威、寶生で中野岩太、本間廣清、徳永重康喜多で飯田聽泉等であつた。

觀世流改訂本發行問題

丸岡桂が計畫した觀世流改訂本の發行は、はしなくも宗家對清之の確執となつた。觀世宗家本發行元たる檜書店は丸岡桂を相手どつて訴訟したが、裁判の結果は、檜方の敗北となつた。この問題の紛争中に清之は歿したが、養嗣子喜之は宗家から破門せられるに至つた。改訂謡本別巻云

「改訂本の發行は、丸岡桂觀世清之の發起にかゝり、其本文は文學博士井上頼國監修のもとに丸岡桂其任に當り、其節付は自家所藏の秘本をもととして觀世清之其改訂の任に當りたるもの

なり云々」

とあるに依つて改訂本發行の由來は明かである。五流宗家は四十二年六月廿四日に左の如き申合書を作つて謠本の濫行を取しまらんとした。

「宗家の承認せざる謠本の刊行は能樂道の慣例を破り、其秩序を紛亂するものなるを以て、其謠本に依つて教授すべからざる旨を一般に通知し、若しこの主旨に背くものある時は藝事上の交際を謝絶するものとす」

右申合確守の證として左に署名候也

寶生九郎

觀世清廉

金春七郎代

櫻間伴馬

金剛鈴之助代

寺田左門治

喜多六平太

明治四十二年六月二十四日

佛人メートル博士の來朝

この年十一月、佛人メートル博士再來し、能樂を研究した。メートル博士は西洋人中能樂を理解せる點に於いては第一人者だ、奈良美術、日本美術小史の著述がある。博士に依つて能樂は泰西諸國へ紹介せられた。

能樂源流表彰展覽會

明治四十三年に入るや、早稻田大學は、四月の好季節に日をトして、能樂源流表彰會を催うした。會は展覽會、講演、演能を催うし能樂界に一大刺戟を與へた。特に吉田東伍の試みた「世阿彌を中心觀察點としての能樂源流を表彰す」は、能樂史研究上に一大光明を與へた。

前田邸の天覽能

この年の演能界で特筆すべきは、七月九日に明治大帝が本郷の前田侯爵邸へ行啓なされ、能樂を見そなはしたことであつた。この時の御用は寶生九郎が承はつた。

俊 寬 櫻間 伴馬 寶生 新 川崎 利吉 藤田 多賀藏

二九十八 山本東次郎

半 能

能樂全史

第六編 維新後の能樂

一九八

熊坂	野口政吉	大友信安	大倉繁次郎
鞠座頭			小早川靖二
土蜘蛛	梅若六郎	野口貢五郎	野村萬造
			石田清吉
			幸愛吉
			觀世元規
			寺井三四郎
			杉山立技

二日目は十日で皇后陛下、三日目は十三日で皇太子殿下、四日目は十五日で高官、同族、舊藩士であつた。四日目には山縣公への御馳走として、寶生九郎の雲雀山が組み入れられた。初日に伴馬の俊寛が組み入れられたのは、明治大帝の御所望に依つてあると傳へられてゐる。この大能の後、まもなき六月三十日小鼓の名手三須錦吾が歿した。

明治四十四年五月一日及三日と二日間京都東本願寺大師堂白洲で式能が催うされた。吉例に依つて早朝から始めて深更に及ぶので出勤役者は云ふ迄もなく見物人の辛抱も並大抵ではなかつた。二日間の催能費は一萬五千圓であつた。開口、風流等の古式も行はれた。初日は翁、能九番、狂言六番、其他囃子一調等があつた。

華族會館の
紀念能

第七編 大正時代の能樂

大正帝御即位、御大典御祝の能は、宮中に臨時にしつらへた御舞臺で催うされた。この名譽ある御舞臺は華族會館に移されて保存せられてゐる。御舞臺の御下賜をうけた華族會館では大正六年五月二十二日に大正帝皇后宮の行幸啓を仰いで能樂を催うした。

己	八	幡	喜多六平太	野島	信
	棒	縛	野村萬作		
雲雀山	觀世元滋	寶生	新		
一春日龍神	松本	長			
舞仕二人靜	梅若萬三郎				
舞二人靜	梅若六郎				
箴	金剛右京				
野	櫻間金太郎				
守					
夜討會我	實生重英				
	近藤乾之				

歐洲大戰休
戰祝賀の能

こえて大正七年十二月には、能樂師主催となり、歐洲大戰休戰祝賀の能を催うし、一千有餘の人々を招待した。演能後模擬店を開き、各流の樂師假裝をして其間を斡旋した。面白い企てであった。

寶生九郎病
歿

この時代に入つてから、寶生九郎（ハシジヨウクロー）、櫻間伴馬（サクラマベンバ）（左陣）觀世元規（カンゼモトツグ）等老大家相ついで他界し、能樂界は若いものゝ天下となつた。寶生九郎歿後は、養子重英（シゲフサ）が家藝をついだ。

觀世對梅若
問題と能樂
協會

前代から此時代へ残された大問題は、觀世宗家對梅若の問題であつた。大正七年能樂會の徳川會頭は、この問題の解決を切に望まれた。其解決の一法として、能樂協會（ノイガクキョウカイ）を設け、能樂社會の出來ごとはこの機關に依つて解決しやうとの議が起つた。これが動機となつて能樂協會設立の運動が始められた。大正九年三月三十一日に、全國各流代表者會が行はれた。其後いろ／＼の曲折をへて能樂協會は設立せられ、大正十一年三月十九日から五日間靖國神社能樂堂で披露能を催うした。この時の純益七千圓、これで協會の基礎だけは出來上つた。又大正年間の出來ごとでは、筆者主催の富士山頂謡曲野球大會（フジサンチョウキョウキョクキョウグ）も特筆大書すべきであると信ずる。富士山頂野球大會は前後七回行はれた。

梅若流獨立

觀世宗家と梅若家との間にわだかまれる暗礁は免狀發行の問題であつた。この問題を解決すべくいろ／＼人が中間に入つたが何れも成功しなかつた。能樂協會設立の運動と共に、この機に乗じて之を解決しやうとの企てたが輿論となつてあらはれたのである。其後いろ／＼曲折の結果、梅若家は、五流をはなれて一流樹立と云ふことになり、萬三郎が宗家となつた。梅若流獨立に至る迄の經過は、餘りに時代が新らしく公正なる批判も困難なので、今之を論すべきでないと思ひ、詳述するをさけた。

震災後の能
樂

大正十二年九月一日の大震災のために、能樂界のうけた打撃は甚大なるものであつた。一時は當分の間、東京で能が行はれるやうにならふとは思はれなかつた。けれ共、帝都の復興が思ひの外早かつたやうに、能樂の復興も早かつたが、残念でならないのは再び手に入れることの出來ない面や裝束、傳書類が焼失してしまつたことである。

昭和五年五月二十日印
昭和五年五月二十五日發行

【定價金貳圓也】

著者 東京市牛込區納戸町十四番地
橫井春野

發行兼印刷者 東京市神田區錦町一丁目十番地
檜常之助

發行所

東京市神田區錦町一丁目十番地
合資會社 檜書
京都市二條通麩屋町角
檜書店京都出張所



6



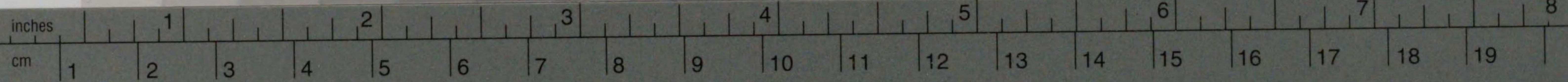
606
90

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

